

山口県埋蔵文化財調査報告 第159集

はやし
林 遺 跡

—平成4年度県営圓場整備事業に伴う発掘調査報告—

1993

財団法人 山口県教育財団
山口県教育委員会

序

山口県では、活力に満ちた地域社会の実現にむけて、農業基盤整備事業をはじめとする様々な諸施策が推進されており、また、住みたくなるふるさとを創造し、生き甲斐のある県民生活を築くために、豊かな文化環境づくりが進められています。

(財)山口県教育財団と山口県教育委員会では、県営圃場整備事業に伴う工事からかけがいのない埋蔵文化財を保護し、開発と文化財保護の調和のとれた県土づくりをめざして、埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。

本書は、県営圃場整備事業に伴う林遺跡の発掘調査報告書です。この報告書が、山口県の歴史を学ぶ上で、また埋蔵文化財をより深く理解していただく上で、ご利用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に、ご理解とご協力をいただきました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

(財)山口県教育財団
理事長 高山 治

山口県教育委員会
教育長 高浜 哲

例 言

1. 本書は、県営園場整備事業に先だって平成4年度に実施した熊毛郡大和町大字三輪所在の^{くまげ やまと みわ}はやし林遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査組織は次の通りである。

調査主体：(財) 山口県教育財団・山口県教育委員会
調査事務：(財) 山口県教育財団・山口県教育委員会文化課
調査担当：総括 中村徹也〔山口県埋蔵文化財センター所長〕
 〃 村岡和雄〔山口県埋蔵文化財センター主任〕
主任 尾崎雅一〔(財) 山口県教育財団指導主事〕
 楢崎悦夫〔(財) 山口県教育財団指導主事〕
 谷口哲一〔山口県埋蔵文化財センター文化財保護主事〕

整理作業：(財) 山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センター整理室
3. 調査に当たっては、山口県農林部耕地課・山口県柳井土地改良事務所・大和町教育委員会・塩田土地改良区及び地元関係各位に多大なご協力を受けた。
4. この報告書に使用した遺跡位置図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図(光・柳井)を複製したものである。
5. 本書で使用した方位は、国土座標の北で示し、標高は海拔標高である。
6. 図版中の遺物番号は、遺物実測図のそれと対応する。
7. 本書で使用した遺構略記号は次の通りである。

 竪穴住居跡・掘立柱建物跡：SB 溝状遺構：SD 土壇：SK 櫛列：SA
8. 本書に収録した実測図・写真及び、本文の執筆は、谷口・尾崎が分担し、編集は、尾崎が行った。

目 次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	2
III	遺構	6
IV	遺物	13
V	まとめ	17

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図	調査範囲と周辺地形図	2
第3図	I・II地区遺構配置図	3・4
第4図	III地区遺構配置図	5
第5図	竪穴住居跡実測図(1)	7
第6図	竪穴住居跡実測図(2)	8
第7図	竪穴住居跡実測図(3)	9
第8図	掘立柱建物跡実測図	9
第9図	土壌実測図	11
第10図	溝状遺構土層断面図	12
第11図	出土遺物実測図(1)	13
第12図	出土遺物実測図(2)	15
第13図	出土遺物実測図(3)	16

図 版 目 次

図版1	I・II地区近景、完掘
図版2	III地区近景、完掘
図版3	III地区SB-6(完掘、土器出状)
図版4	I地区SB-1(完掘、土器出状)
図版5	III地区SB-3(完掘、住居内土壌) SB-4(完掘)
図版6	II地区SB-2(完掘) III地区SB-5(完掘) SB-7・8
図版7	III地区SK-21 I地区SK-15 SK-2
図版8	I地区SK-9・10・11 III地区 溝状遺構
図版9	出土遺物(1)
図版10	出土遺物(2)
図版11	出土遺物(3)
図版12	出土遺物(4)

II 調査に至る経緯と概要

近年の農地改良工事の推進によって、大和町三輪の田布施川流域一帯が、園場整備対象地区となった。これを受けて山口県教育委員会は、事業を施工する地区内において、埋蔵文化財の埋存する可能性が高いとみられる地域について予察調査を平成2年12月に実施した。その結果、試掘坑から多くの土器片・遺構が発見されたため、遺跡として認定され、所在地の字名を冠して『林遺跡』と命名されることとなった。

この結果を踏まえて、山口県教育委員会では山口県農林部耕地課と協議を行い、事業計画に合わせ事前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることとなった。調査は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助をうけて、これら両機関が共同で行うこととなり、平成4年4月20日より本格的な発掘調査を開始した。

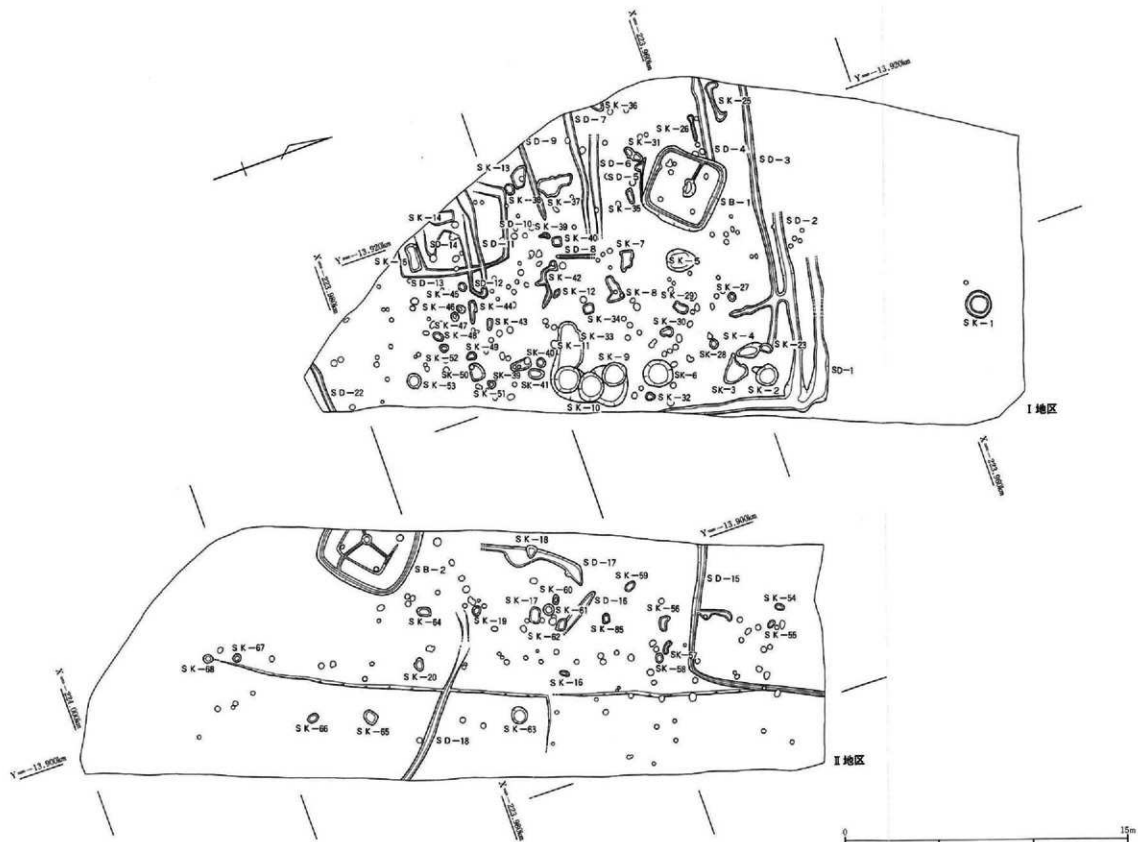
調査は、まず、調査区内にトレンチを開け、遺構面までの深さを調べるとともに、遺構の広がりや性格あるいは層序関係を把握した。これにより、遺構の埋存の可能性が高いとみられる箇所を選定し、Ⅰ～Ⅲ地区の調査区を設定した(第2図)。次に、遺構面上に乗っている耕土・盤土等を重機によって除去した後、人力による精査を行い各遺構を検出した。

遺構密度の濃いⅢ地区から調査を開始し、Ⅰ・Ⅱ地区の順に進めていった。Ⅲ地区では竪穴住居跡4軒、溝状遺構3条の他遺物も多く見つかった。Ⅰ・Ⅱ地区については、遺構の上面を包含層が厚く覆っていたため、検出に苦勞を要した。Ⅰ・Ⅱ地区とも竪穴住居跡1軒の他、土壇等多数の遺構及び遺物を検出・収集した。

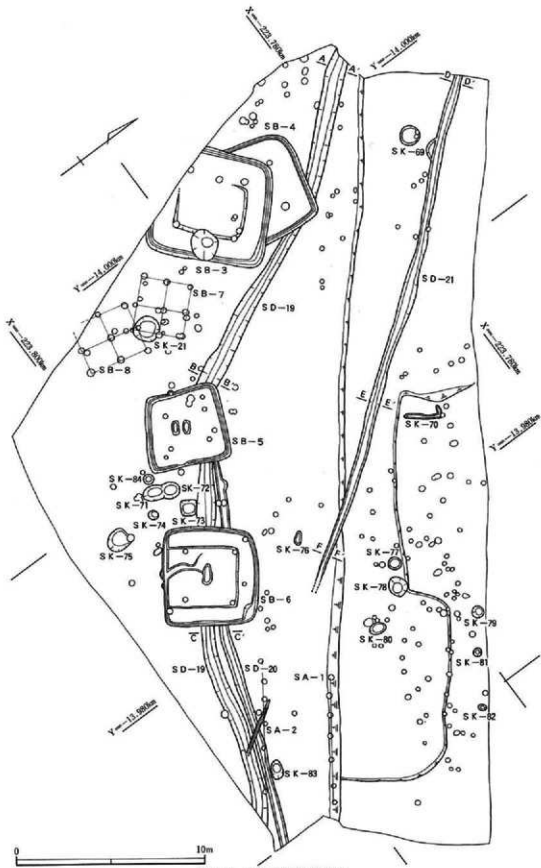
発掘調査の結果については、作業員及び関係者にその概要について説明を行い、同年7月4日に全ての調査を終了した。



第2図 調査範囲と周辺地形図



第3图 1·II地区总配置图



第4图 III地区遗址配置图

III 遺 構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡2棟、土壇85基、溝状遺構22条、その他数の柱穴群がある。これらの遺構は、調査地区内に張り出した舌状の丘陵の先端部ないしは縁辺部に相当する地域で多く検出された。地形的にみて、I・II地区とIII地区の間は丘陵間の谷すじにあたるため、これを避けて人々が生活していたことが明らかとなった。

1 竪穴住居跡 (第5～7図)

SB-6

III地区東よりに造られていた、長辺5.32m、短辺5.14m、深さ0.47mの隅丸方形住居跡である。主柱穴は4本、径25cm、深さ12cm。壁に沿って周溝が検出され、特に南西壁面は深く掘り込まれている。床面中央には長円形の土壇(長辺109cm、短辺48cm、深さ18cm)が掘られ、さらに、この土壇と周溝をつなぐ排水溝も認められた。また、南西側を除く他の3辺にはベッド状遺構(高さ6～15cm)が見られた。この住居跡の床面からは、多くの土器が破棄された状態で見つかった。特に、北東側ベッド状遺構上からの出土が最も多い。焼土も中央土壇付近で検出された。床面積は、23.44㎡である。

SB-1

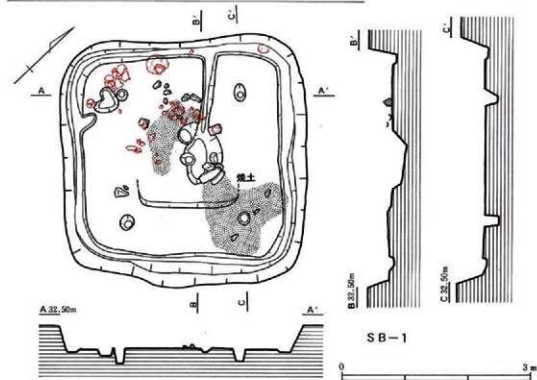
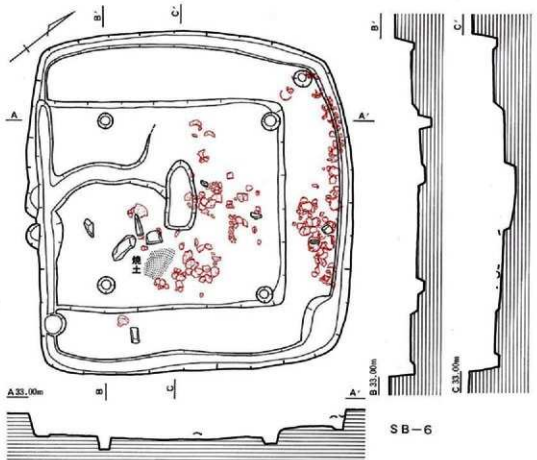
I地区中央西よりに位置する。平面形は隅丸方形で遺存状況は良い。規模は、長辺3.95m、短辺3.85m、深さは、0.39mを測る。屋内には土壇が中央に位置し、この土壇と周溝とを結ぶ排水溝も検出できた。周溝は、周囲を巡っており、床面からの深さは5～6cm。主柱穴は4本で、径の平均が18cm、深さは21cmである。床面からは、大型の壺や甕などの多くの遺物の他、作業台と思われる石が、また焼土も2箇所に広がっていた。屋内の南側のみに、ベッド状遺構の高まりを検出した。床面積は、11.65㎡である。

SB-5

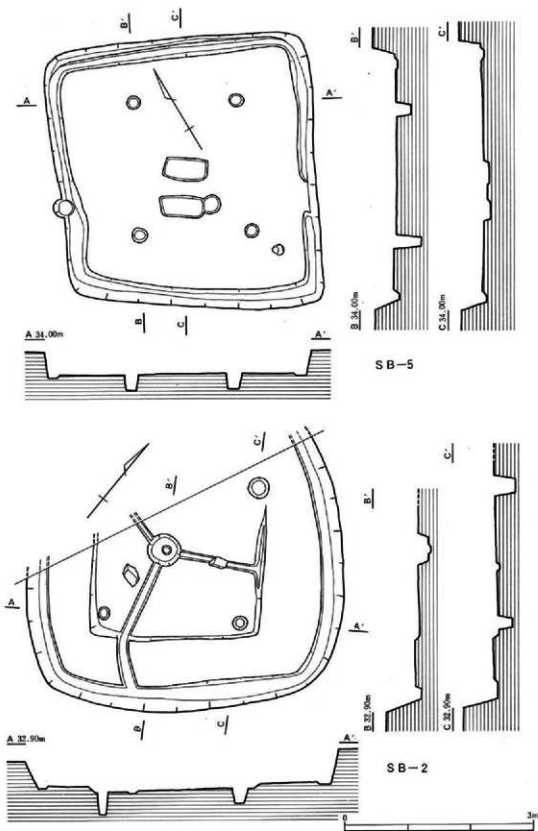
III地区中央に位置する隅丸方形住居跡である。長辺4.36m、短辺4.20m、深さ0.41m。主柱穴は4本で、径22cm、深さ24cm。また、壁面に沿って深さ1～7cmの周溝が巡る。床面中央に二つの土壇が検出された。両方とも平面形は長方形。規模は、長辺二つとも68cm、短辺それぞれ34、36cm、床面からの深さ10、13cmであり、同規模の土壇である。屋内土壇が二つ備わっているのはこの住居だけである。床面積は、15.36㎡である。

SB-2

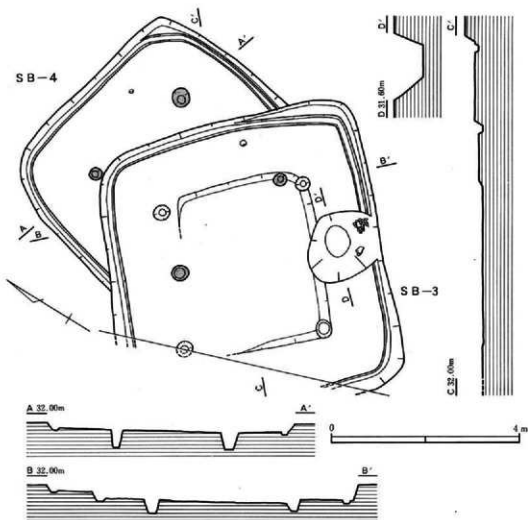
II地区南東側にある。各辺がやや膨らみをもつ隅丸方形である。遺存状況は良いが、西側に町道があり調査区外になるため、完全な形は検出できなかった。規模は、長辺5.00m、幅推定4.36m、深さ0.53m。壁沿いに深さ3～9cmの周溝が巡り、さらに、中央土壇から周溝に向けて三方向に排水溝が掘られている。床面には、北東側を除いてベッド状遺構とみられる段差(4～9cm)が認められた。主柱穴は、一部調査区外のため全てを検出することはできなかったが、4本であると推定できる。径の平均24cm、深さ31cmである。残存する床面積12.04㎡。



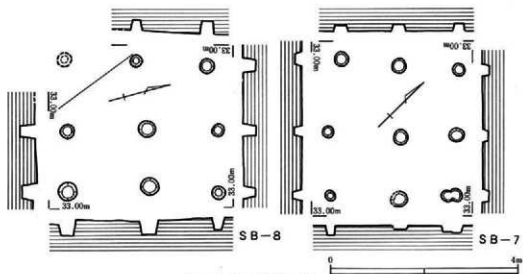
第5图 竖穴住居跡実測图(1)



第6图 竖穴住居跡実測图(2)



第7图 竖穴住居跡実測图(3)



第8图 掘立柱建物跡実測图

SB-3

Ⅲ地区西側で検出された。住居跡西端は調査区外であるため未検出。平面形は隅丸方形である。SB-4と切り合い、SB-4廃絶後SB-3が構築されたとみられる。長辺6.20m、短辺5.84m、深さは0.39mであり、本遺跡の中で最大のものである。主柱穴は4本、径の平均31cm、深さ27cm。四辺の壁に沿って深さ5～7cmの周溝が巡り、また、ベッド状遺構（高さ4～8cm）も北西側を除く三方に確認ができた。主柱穴はこのベッド状遺構に接するように検出された。これは、SB-2及びSB-6の形態に類似している。なお、この住居跡の床面南東側には径約70cm、深さ90cmの屋内土壇が掘り込まれていた。残存する床面積は、25.68㎡。

SB-4

SB-3に先行する隅丸方形住居跡で、長辺の推定値5.80m、短辺5.38m、深さは0.36mを測る。主柱穴は4本、径の平均31cm、深さは推定35cmである。壁面には、深さ3～12cmの周溝が巡る。ベッド状遺構は検出されなかった。推定床面積は、26.76㎡である。

2 掘立柱建物跡（第8図）

SB-7

Ⅲ地区南東部に位置する。身舎2間×2間で、桁行長2.70m、梁行長2.60mの掘立柱建物跡である。柱穴は、9個で総柱とみられ、径及び深さの平均は、それぞれ26cm、15cm。建物の向きから、SB-3に付属するものではないかと考えられる。

SB-8

Ⅲ地区南東部に位置し、SB-7と一部切り合いように検出された総柱の掘立柱建物跡である。身舎2間×2間で、桁行長3.20m、梁行長2.60m。柱穴は8個で、1個は調査区外にあるものと推定される。径の平均29cm、深さは27cmである。SB-7同様時期は明確でないが、建物の向きから、SB-4あるいはSB-5に付属するものではないかと考えられる。

3 土壇（第9図）

土壇も各地区から検出された。遺物が少なく判然としないが、ほとんどは中世から近世に比定されるものであろう。しかし、SK-21、15については、出土遺物から竪穴住居に伴うものと考えられる。

SK-21

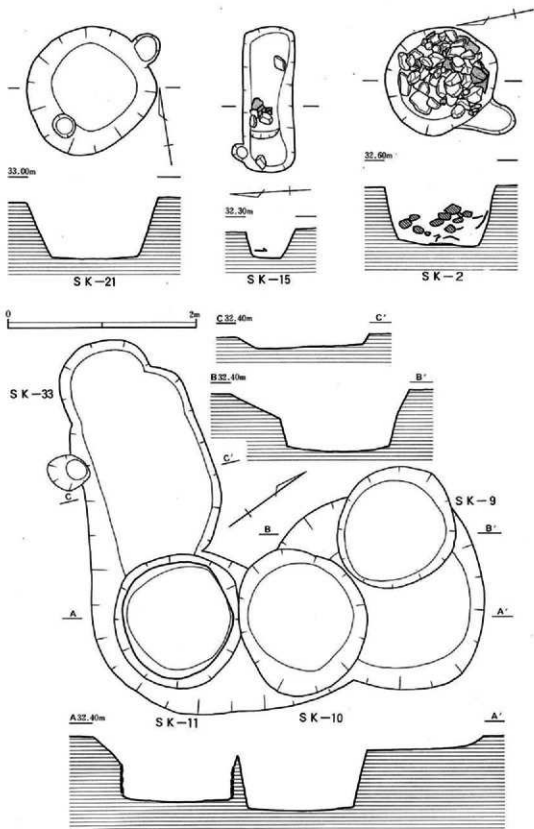
Ⅲ地区、SB-7、8と位置的に重複する。径1.40m、深さ0.64mのほぼ円形の土壇である。

SK-15

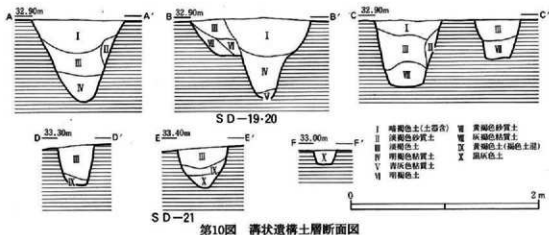
I地区南側。南北0.53m、東西1.52mの長方形。深さ0.28mを測る。東側に6cmの段差が認められる。

SK-2

I地区中央部東よりに位置する。径1.18m、深さ0.62m。瓦質土器と石が積み重なるようなかたちで検出されたので、おそらく投棄場とみられる。



第9图 土壤实测图



SK-9・10・11

I地区中央部東よりある。SK-9, 10, 11のそれぞれの径及び深さは、順に1.24m、1.36m、1.34m、0.64m、0.94m、0.63mである。SK-11の内側には、一部に板を張り籠を巡らせていた痕跡が認められることから、貯蔵を目的に使用された近世土壌と考えられる。

4 溝状遺構 (SD)

I地区では、15条のSDが検出されたが、大きく二つに分けることができる。一つは地区西側の包含層下面で検出された弥生時代のSD、もう一つは北側にかたまって発見された中世～近世のSDである。前者は人工的なSDというよりも、丘陵の傾斜方向と同じ方向に流れ、堆積した包含層によりその範囲が不明瞭となることなどから、緩斜面を流れた自然流路と考えたい。

II地区では、中央を東西に横切るSD、北側で検出された鍵状に曲がっているSDが主だったもので、いずれも中世のSDとみられる。

III地区では、調査区を南北に横断するように3条のSDが検出された。一番深く幅の広いのはSD-19。規模は、幅0.5～1.2m、深さ0.62～0.86mである。この途中から派生し平行するSD-20は、幅0.5～0.6m、深さ0.31m～0.47mを測る。二つのSDの全長は約34mである。この2条のSDは、地山である暗黄褐色粘質土、さらにその下位面の砂礫層をも掘り込んでいた。二つのSDに平行するようなかたちで、山麓側にSD-21が見つかった。幅0.50m～0.20m、東側では削平を受け検出できないところもあった。これら三つのSDは、切り合い関係から、SD-19, 20がまず掘削され、その後、SD-21が掘り廻らされたとみられる。これらのSDの断面形はV字状で、上面をかなり削平されているとみられ、本来は相当大型のSDであったと推測できる。SD-19, 20, 21の時代は、出土遺物から弥生時代中期初頭に比定できる。

5 その他の遺構

III地区東側、旧水田の段差跡に沿うように柵列(SA-1)が検出された。さらに、それと平行するように、3.5m南西側にも柵列(SA-2)が見つかった。前者は、柱間6間で柱間寸法の平均1.09m、径21cm、深さ28cm。後者で確認できた柱間は4間、柱間寸法1.16m、径20cm、深さ20cmであった。時期は不明である。

IV 遺物

林遺跡から出土した遺物は、弥生時代中期初頭と、終末期から古墳時代初頭の土器、古墳時代の須恵器、中世の土師質土器、近世陶磁器、石器（蔽石・砥石）である。このうち、須恵器・土師質土器および近世陶磁器は少量・細片であり、遺物のほとんどは住居跡から出土した終末期から古墳時代初頭の土器で占められ、遺跡の中心はこの時期であったとみられる。特にSB-6からは大量の土器が破棄された状態で出土し、良好な資料が多く得られた。

ここでは、出土遺物の中心をなす弥生時代中期初頭と終末期から古墳時代初頭の土器群について述べる。前者は、SD-19から、後者は竪穴住居群からの出土である。

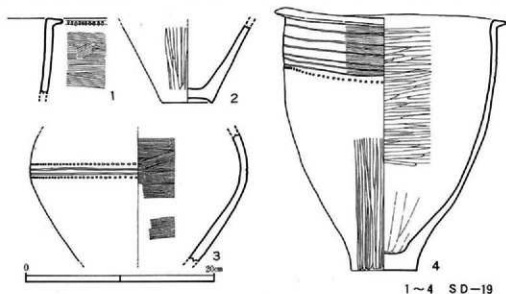
SD-19出土の遺物（第11図）

1～4はいずれもSD-19の埋土中から出土した。1は短く厚い逆L状の甕口縁部で、上面を平坦にし、端部に刻み目を施す。外面ハケメ調整、内面ミガキ調整。2は上げ底の甕底部。内外面ミガキ調整。3は甕の胴部。胴部最大径の外面に2条の沈線とその上下に刺突文を施す。外面ミガキ調整、内面ハケメ調整。4は甕。平底の底部から外反気味に立ち上がり、短く厚い逆L状の口縁を持つ。口縁下にはハケメ調整後、不明瞭な沈線を6条施し、その下に刺突文を施す。外面胴部下半はミガキ調整、内面はミガキ調整と底面近くはナデ調整。器高28.3cm、口径24.4cm、底径6.8cm。いずれの土器も胎土は精良で焼成堅緻。色調は橙褐色～黄褐色。なお、SD-21からも細片ながら同時期とみられる土器が出土した。

竪穴住居跡出土の遺物（第12・13図）

SB-3・4（5～11）

6はSB-4出土。他はSB-3で、そのうち8・10は住居内の土壌から出土した。3はわずかに平底の小さな底部。6・7・10は碗。丸底で口径に対して器高が低く、口縁端部は尖り気味に



第11図 出土遺物実測図（1）

おわる。器面に指圧痕を残し、外面は削り調整を施す。9は小型丸底壺。底部を欠損する。口径が胴部最大径より大きく、口縁はわずかに外弯しながら立ち上がり、端部は尖り気味におわる。胴部外面はハケメ調整、内面は削り調整。8・11は壺口縁部。大きく張る胴部からくの字状に屈曲する口縁を持ち、端部は上方にわずかにつまみ上げる。外面はハケメ調整、内面は頸部近くまで削り調整を施す。

SB-5 (12~15)

12・13は壺底部。12は尖り気味の丸底で、穿孔を有する。13は小さい平底。いずれも外面はハケメ調整、内面は削り調整。14はミニチュア土器とみられる底部。わずかに平底を呈し、内外面はナデ調整で指圧痕が明瞭に残る。15はその形態からスプーン状土製品とみられる。長さ3.5cm、幅1.4cmの取っ手を持ち、「さじ」部はその半分を欠損する。

SB-1 (16~22)

16は複合口縁の壺。17はその頸部から胴部である。16は頸部から大きく外反し口縁立ち上がり部は内傾して端部は平坦におさめる。立ち上がり部の外面には不整な鋸歯文を描き、口縁に至る屈曲端部にはX状の格子文を施文する。口縁下および内面はハケメ調整。18は手捏ね土器で口縁を欠損する。球形の胴部で内面には指圧痕がみられる。19・20は壺。19は口径と胴部径がほぼ同じで、口縁は緩く外反して端部は平坦におさめる。内外面ハケメ調整。20は胴部径が口径より大きく、口縁はくの字状に屈曲し端部は上方につまみ上げる。外面ハケメ調整、内面削り調整。21・22は平底で胴部はあまり張らない。22は丸底で、外面ハケメ調整、内面ナデ調整。

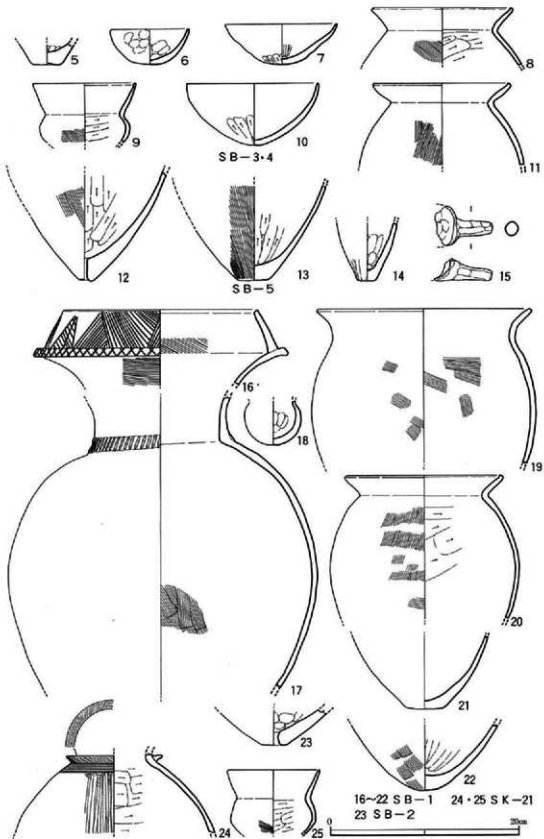
SB-2 (23)

23はわずかに平底を呈し穿孔を有する。内面に指圧痕がみられる。

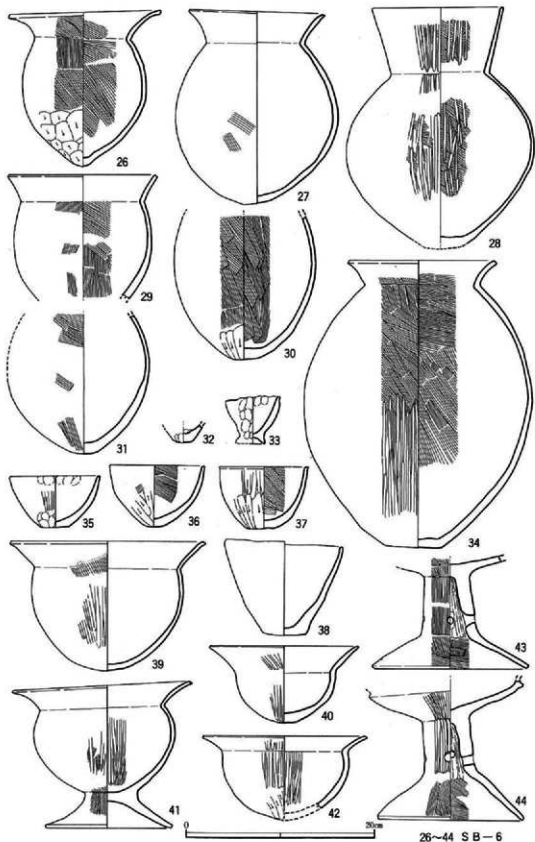
SB-6 (26~44)

SB-6からは多くの土器が破棄された状態で出土した。これらの土器は個体数にして40あまりになるが、ここではその中で残存状態がよく、形態が明らかなものをとりあげる。

26・29~31は壺。26は口径が胴部径より大きく、外反する口縁は比較的長い。底部は尖底気味。外面は胴部下半が削り調整、胴部上半と内面はハケメ調整。器高16.7cm、口径16.1cm。29は口径が胴部径よりわずかに大きく、球形の胴部から口縁は外傾して立ち上がる。内外面ハケメ調整。30・31は丸底の底部に球形の胴部を持つ壺とみられる。底部周辺は削り調整で、内外面に細かいハケメ調整を施す。27・28・34は壺。27は丸底の底部に球形の胴部を持ち、口縁はくの字状に屈曲する。器高21cm、口径13.5cm。28は底部を剝離欠損する。偏球形の胴部に、外傾して立ち上がる口縁は直口に近い。内外面にはハケメ調整の後荒いミガキ調整を施す。器高25.5cm、口径13.4cm。34は大きく張る胴部にくの字状に屈曲する口縁を持ち、口縁端部は平坦で面を持つ。内外面は細かいハケメ調整の後、胴部下半はミガキ調整。底部は平底。器高30.8cm、口径15.0cm。32・33は手捏ね土器。32は平底。33は上げ底の鉢型で、指圧痕が明瞭に残る。



第12圖 出土遺物実測圖(2)



第13图 出土遺物実測図(3)

器高5.1cm。35～38は鉢。平底あるいは小さな平底で、口縁にかけて内弯して立ち上がり、口縁端部は平坦で面を持つ。外面は削り調整で、内面はハケメ調整を施す。38は平底で胴部は外傾して立ち上がる。口縁端部はやや丸くおさめる。器高10.1cm、口径12.3cm。39・40・42は鉢。丸底で球形の胴部に長い口縁を持つ。40は口径に対して器高が低く、小型丸底壺の形態に近い。いずれも内外面はミガキ調整。42は外面にケズリ調整を施す。39は器高8.3cm、口径15.4cm。40は器高13.8cm、口径20cm。41は台付き鉢。他と同様な形態の鉢に低い脚部を持つ。内外面はミガキ調整。器高13.6cm、底径13.4cm。

土壌出土の遺物（第12図）

SK-21（24・25）

24は胴部が球形で頸部に突帯を巡らす壺とみられる。突帯にはその上下に斜線を密に施し、突帯下にも多條の沈線を描く。外面は丁寧にミガキ調整を施し、内面は削り調整。25は小型丸底壺。口径が胴部径よりも大きく、口縁は尖り気味におさめる。SB-3出土の小型丸底壺（9）とほぼ同一の形態である。

V ま と め

林遺跡は石城山から派生した小丘陵の西に位置する。多賀山を源に流れる田布施川は石城山を取り巻くように遺跡の所在する三輪地区で流れを南東に変え、田布施盆地を潤しながら平生湾に注ぐ。田布施川中・下流域には多くの遺跡が集中し、原始より人々の歴史の痕跡が明瞭に残る県東部では代表的な地域であった。今回の調査は、それまで遺跡調査も少なかった田布施川上流域のものであり、調査の成果は田布施川流域の歴史を考える上で貴重な資料を多く与えてくれた。

遺跡は、三輪神社のある三輪山から西に派生した二つの小丘陵の先端部に広がり、弥生時代から近世までの遺構・遺物が検出された。このうち中世から近世にかけての遺構は、柱穴・土壇であり数的に少ないので、短期間の集落であったとみられる。遺跡の中心的な時期は弥生時代から古墳時代にかけてであり、ここではその概略についてまとめる。

この地域に人々が生活の跡を残し始めるのは弥生時代中期初頭である。それを示すものとして、Ⅲ地区を北から南にほぼ横断するように検出されたSD-19～21がある。これらは幅1.2m、深さは最大で0.86mを測り、断面V字形を呈する。この溝はその断面形から明らかに人為的に掘削されたものであり、規模・立地から集落を取り囲む環濠または条溝とみられた。SDの西側は、約10mで南からの谷すじにあたり、砂礫層の堆積と湧水が認められることから、集落の存在する可能性は低いとみられる。調査でも同時期の遺構は皆無であった。一方SDの東側は標高55mの丘陵が隣接し、その派生する向きとSDが同一方向である。さらにこの丘陵は比高20mで、頂上部は弥生時代の集落が存在するほどの平坦部が認められる。これらから、SDは丘陵裾を巡る環濠であった可能性が高い。残存するSDの規模は小さいが、おそらく上面をかなり削平されているとみられ、本来は環濠としての十分な幅と深さを有していたとみられる。

なお、II地区南端には中期の土器を含む包含層が堆積していることから、三輪山から派生するいくつかの低丘陵には中期の集落が埋存する可能性があるであろう。

次に、竪穴住居跡群の時期を考えてみたい。このうちSB-6の出土土器は時期決定には良好な資料であり、これらの土器をまず検討する。土器の特徴は壺・甕など長胴化し、中位で張る胴部と丸底化する底部を持ち、内外面はハケメ調整を施す。形態的にも当地域の終末期の指標土器である平生町吹越遺跡出土の土器に類似するものがある。これらから吹越遺跡とはほぼ同時期とみてよいだろう。ただこの時期の典型的な複合口縁壺がみられないことや、高杯の形態が異なるなどの違いはみられる。特に高杯からみれば吹越遺跡よりもやや新しい様相を指摘できよう。なおSB-6と同時期の住居は他にSB-5が該当する。一方SB-1・3・4出土の土器は、典型的な複合口縁がみられるが、口径が胴径より大きい小型丸底壺や器高の低い碗、大きく張る胴部と口縁端部を上方につまみ上げる甕、さらに内面調整はケズリ調整を施すことなどから、庄内式から布留式の古い段階にかけての時期とみられる。

以上をまとめると竪穴住居跡の時期は二つの時期に分けることができる。すなわち吹越遺跡とはほぼ同時期の終末期と、庄内式から布留式にかけての二時期である。これらの時期には断絶があるようにみられるが、前述の通り、SB-6の土器は吹越併行期よりも新しい様相を指摘できるので、概ね集落は間断なく存続したとみてよい。

これらの所見から、林遺跡の集落は、谷すじを挟んで舌状に延びる二つの小丘陵先端部に2～4軒が同時に営まれていたとみられる。これらはそれぞれの独立した集落というよりも、直線距離で200mしか離れておらず、地形的に単位としてまとめることができるので、一つの集落としてみなしてよいと考える。

また今回の調査では、III地区に2棟の掘立柱建物跡を復元することができた。断片的な遺物しかないので詳細な時期は不明ながら、竪穴住居跡との位置関係と棟方向の一致からみて、ほぼ同時期に併存していたとみても大過ないと考えられる。おそらく住居に付属する貯蔵を目的とした倉庫とみられる。

このように林遺跡の調査は、これまで資料の乏しい田布施川上流域に新たな知見を加えることができた。多くの土器は弥生時代終末期から古墳時代にかけての土器編年へ新資料となり、検出された遺構群は、周辺の小丘陵に遺跡の埋存の可能性を示唆し、さらに丘陵を単位とする集落の構成を考える上で典型的な資料となりうるものであろう。

参考文献 平生町教育委員会・山口県教育委員会『吹越遺跡第2次調査概報』1972



I、II地区近景（北から）



I、II地区発掘



Ⅲ地区近景（南から）



Ⅲ地区 完掘



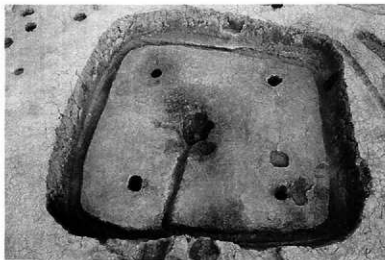
III地区SB-6
突掘



III地区SB-6
土器出状



III地区SB-6
土器出状



I 地区SB-1
完掘



I 地区SB-1
土器出状



I 地区SB-1
土器出状



Ⅲ地区SB-3
完整



Ⅲ地区SB-3
住居内土境



Ⅲ地区SB-4
完整



II地区SB-2
完掘



III地区SB-5
完掘



III地区SB-7·8



III地区SK-21



I地区SK-15



I地区SK-2



I地区

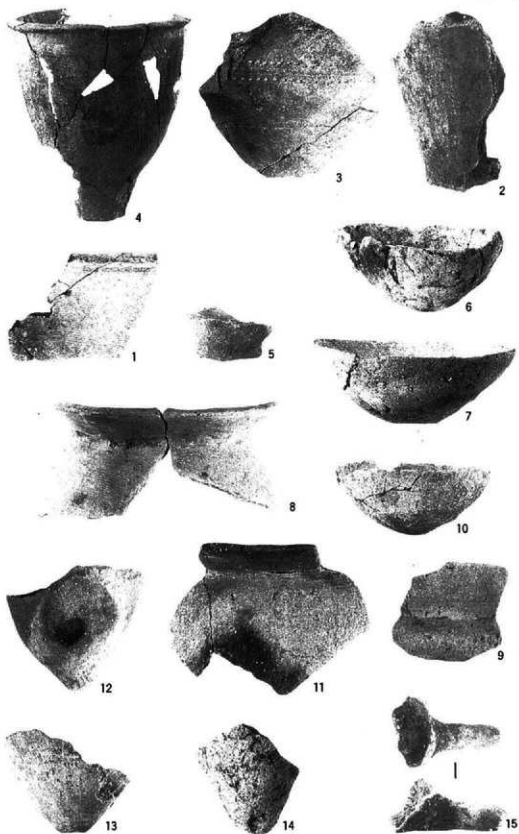
SK-9・10・11



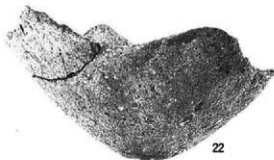
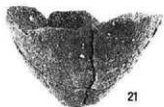
III地区溝状遺構
(北西から)



III地区溝状遺構
(南東から)



出土遺物 (1)





26



27



29



28



31



34



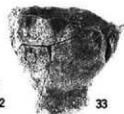
30



38



32



33



山口県埋蔵文化財調査報告第159集

林 遺 跡

—平成4年度県営園場整備事業に伴う発掘調査報告—

1993年3月

編 集 財団法人 山口県教育財団

山口県埋蔵文化財センター

発 行 財団法人 山口県教育財団

山 口 県 教 育 委 員 会

印 刷 アロー印刷株式会社